NEWS きのくに

GREEN COMMUNITY COLLEGE

Vol.18【1】

2013〈秋冬号〉

きのくに活性化センター

発行責任者／中田肇　発行日／2013年12月10日

〒646-0011 和歌山県田辺市新庄町3353-9

和歌山県立情報交流センター ビッグ・ユー内

TEL&FAX0739-26-9670

http://www.aikis.or.jp/～aoi-kii/

米づくりに大きな影響。
影響は園芸農業地域にも－TPPと和歌山農業－

和歌山大学経済学部教授
大西敏夫

上秋津のみかん園

那智勝浦町太田　美しい水田が広がる

TPP（環太平洋連携協定）とは、例外なしに関税を撤廃すること、非関税障壁（物品・サービスの貿易および投資など）を限りなく緩和・撤廃することを基本原則にしています。それゆえ、TPPに参加するということは、わが国では農業をはじめとして、公的医療制度や食品の安全システムなどにも大きな影響をもたらすといわれています。とりわけ農産物において重要５項目（米、麦、牛肉・豚肉、乳製品、甘味資源作物）をかかえる道県を中心に不安感が拡がっています。和歌山県では、その影響はどうでしょうか。

県試算（2008年度実績）によると、TPPに参加し関税が撤廃されると、県内農林水産物産出額で136億円減少すると見込まれています（『紀伊民報』2013.3.16）。この減少額は、農林水産物産出額（1,287億円）の11％にあたります。なかでも減少額の大きな品目をみると、米71億円（産出額の86％減）、温州ミカン26億円（同10％減）、畜産物14億円（同22％減）などです。このように、県内では、米への影響が顕著であることに加え、特産ミカンや畜産などにも影響が及ぶこととなります。

承知のように、本県は果樹王国といわれ、それに野菜や花きなどを含む園芸農業が盛んな県です。現に、部門別農業産出額（2008年度合計1,079億円）の構成比をみると、果実60％、野菜16％、米８％、畜産６％、花き５％などとなっています。このように、園芸生産は県全体の８割以上を占めています。

和歌山農業の特色としては、大雑把にいって園芸農業地域と中山間農業地域の２つに分けることができます。地域エリアとしては、後者が大きいといえます。これらを踏まえながら、以下では、TPPと和歌山農業にかかわって２点指摘したいと思います。

第１に、県試算に示されているとおり、米づくりへの影響がきわめて大きいことです。2010年現在、県内の米作付け農家は１万2,000戸余り、米の生産量（2009～2011年の年平均）は３万7,400ｔです。この生産量は、県人口の約６割（62万人）にあたる年間消費分に匹敵する量です。また、米への打撃は、１つは、「野菜＋米」「果樹＋米」といった複合経営において重要な１部門（「米」所得）を失うことであり、２つは、米単作農家はもちろんのこと、とりわけ中山間農業地域において米づくり農家がいなくなることが懸念されます。

第２に、園芸農業地域において懸念される影響です。もともと果樹や野菜などの品目は関税が低いことから本県の影響は少ないとみられがちですが、果たしてそうでしょうか。上述のように、温州ミカンでの直接的影響に加えて、たとえば全国で少なくない稲作農家が米づくりを止め野菜や花き生産にシフトするとすれば、今後過剰問題と激しい競争が引き起こされることが想定されます。　こんにち、食に関して「安全」「安心」「ほんもの」を消費者は強く求めています。県内の農業者・農業関係者には、TPPを跳ね返すような消費者との連携を視野に入れた取り組みがいっそう重要になると考えます。

CONTENTS

・－TPPと和歌山農業－　大西敏夫 …… 1 面
・きのくに活性化センター　2013年度活動報告 …… 2 面
・日本一の梅の里の活性化へ　岩本恵子 …… 3 面
・古い建物を活用して、カフェ運営　河原美和子 …… 4 面
・語り部として伝えたい熊野の世界　福辻京子 …… 5 面
・南紀熊野サテライトの窓から　古久保綾子 …… 6 面

NEWS GREEN COMMUNITY COLLEGE
きのくに
Vol.18【2】
2013〈秋冬号〉

きのくに活性化センター2013年度の取り組み

●紀南地域の廃校舎調査へ。来春にはブックレットを発行

過疎化と少子高齢化、さらに平成の市町村合併による統廃合などによって、和歌山県内では廃校になる小中学校が相次ぎ、今後は都市部の中心市街地でも廃校舎が生まれてくる。使用されなくなった学校施設をどうするかは課題になっている。

きのくに活性化センターでは、「廃校舎の利活用に関する研究会」を発足し、過去に収集した資料を踏まえて本年度先行モデル校の調査に着手した。調査には行政、一般市民、大学関係者らが参加し、これまでに串本町(旧 古座町姫)養春小学校の観光・都市との交流の拠点をめざす取り組みや古座川町の七川小学校平井分校を舞台にした女性の参画による平井ゆずの里の柚子ビジネスなどの現地調査を行った。来春には10校程度のモデルを紹介する「ブックレット」を発行する。

●新宮市仲之町商店街活性化の可能性を考える―商店主・市民・観光客調査から

地方都市の中心市街地の空洞化が進むなか、和歌山大学経済学部の学生は「大学と商店街の連携・交流の可能性」を考えるを課題に、仲之町商店街で2012年度から調査研究を行っている。

本年度は、市民が仲之町商店街をどのように見て、利用しているのかを調べるとともに観光の視点から仲之町に目を向けるアンケート調査を実施した。学生たちはこれまでの調査結果について、11月18日に商店街内のサンタウンホールで報告会を開き、商店主や行政、商工会議所関係者と意見交換をし、「連携・交流」による活性化などを提案した。

アンケート調査には和歌山県地域・自治体問題研究所のメンバーや地元市民も参加した。

●「熊野発サンマ食文化研究会」設立に向けて始動

きのくに活性化センターでは、日本列島に沿って南北に伸びる「サンマ街道」―サンマ漁業が盛んな町とそれぞれの地域に残る「サンマの食文化」や「民俗」について調査研究を進めている。サンマ文化を熊野の地域づくり、まちづくりに活かすのが目的である。

このため、研究会設立に先駆けて紀伊半島のサンマ文化―和歌山県・三重県(熊野地域)・奈良県吉野地方と東北地方のサンマ水揚げ上位を誇る地域で、伝承されるサンマの食文化、サンマ漁の漁法やサンマの商品化・ブランド化の現状、サンマによるまちづくりなどの調査を進めている。

2013年度きのくに活性化センター総会

七川小学校平井分校(古座川町)

七川小学校(古座川町)
平井分校の旧図書館はカフェに

養春小学校(旧 古座町姫)の時計台と校舎

仲之町商店街活性化調査

仲之町商店街活性化意見交換会

サンマすし

南紀熊野サテライト授業風景

NEWS きのくに GREEN COMMUNITY COLLEGE
Vol.18【3】
2013〈秋冬号〉

日本一の梅の里の活性化へ

梅と漁業・観光・商業などとのコラボレーションをめざす

株式会社岩本食品　取締役
みなべ町観光協会　副会長　岩本恵子

みなべ町の梅産業は、いま少し低迷気味です。消費が次第に少なくなり収入、売上が減っている。私の会社でいえば、客単価で１～２割は落ちているでしょうか。一時の「梅ブーム」が去ったのも、一因かと思います。生産者、加工業者の多くがいま辛抱の時期です。産官民一つになって努力しないといけない時代です。ここを生き延びて、次のステップをめざさなくてはなりません。みなべの梅は、良いのですから。

会社（岩本食品）は、創業100年を迎え、2009年に和歌山県の「100年企業表彰」を受けました。現在生産している梅製品は、梅干関係では20種類、梅干ではない甘漬け、ジャム、ジュースなど梅を入れたものが10種類ぐらい、だいたい30種類ぐらいです。そのうち８割近くは梅干です。

梅干は、しょっぱい梅干ではなく、塩分を極度に抑えた蜂蜜入りなどに人気が集まっています。塩分は年を追って少なくなり、今年は塩分ゼロの梅干を売り出しました。消費者のニーズにどのようにこたえるか、健康食品では冷凍梅も販売しています。完熟梅を冷凍し、これを使った梅酒、梅ジュースの作り方をお客様に提案しています。そのため、瓶やキット、お砂糖、梅なども置いています。冷凍梅は農協でも売り出し、好調なようです。昔からの伝統を大切にしながら、既成の概念にとらわれない商品開発が重要になってきています。

商品開発は、何と言っても女性目線が欠かせません。買い物するのは女性ですよね。この梅を買ってくれるのも９割が女性です。消費者はどういうものがほしいか、いくらぐらいの価格帯のどういうものを贈ったら相手が喜んでくれるか、そういうことは買い物のなかで培われることです。ですから、消費者である女性が、女性力をもって商品開発しよう、といつも言っています。社員の３分の２は女性です。ものごとを考える女性の柔軟性と消費者感覚で企画するというのが、いまどこの企業でも大事になっています。「何言ってもいいよ、どんなことでも言う」を心がけています。スポーツ梅はそうしたなかから、商品化されました。

梅学、梅狩り、収穫した梅を使っての梅酒や梅ジュースづくり、梅ジャム体験、工場インターンシップ、レストランのクリスマスディナー、直売所、梅料理体験など、いろいろと挑戦しています。海辺のレストラン「カフェ・ド・マンマ」は開業から５年ですが、梅干屋のアイディアや梅を“隠し味”にしたメニューのお料理、ピザトーストに梅ジュースやケーキなどを提供しています。「ここすばらしいね、海のパワーもらえるわ」という声をよく聞きます。スタッフはいま６人、男性は店長１人でほかの５人は紀州娘で頑張っています。東京の高級住宅街に開いた直営販売店「ぷらむ庵（現在は世田谷ぷらむ庵）」は、路面店で業績はようやく上向いてきていますが、大都市のお客が何を求めているか、目が肥えた方の声は参考になりました。アンテナショップとしての役割を大いに果たしてくれています。

企業で一番大事なのは、信用、信頼されることだと思います。誠実な企業でなかったらダメです。地元の人が紹介してくれるような地域一番店をめざす。他所がやっていない、おもしろいことを考える企業でありたい。

日本一の梅の里を元気にしていきたい。そのためには、梅だけではだめです。漁業や商業とコラボレーションして全体が元気になる町をめざす。みなべ町は全国有数のイワシの水揚げを誇り、800種類の魚が獲れるのです。大勢の観光客が訪れる町にしたい、みなべは海の幸・山の幸、歴史的にも恵まれ観光資源となる宝の山がいっぱいです。それらを大いに生かしていきたいと思っています。梅を中心とした産業クラスターですね。私たちの企業としても梅をもっとＰＲして、梅を世界に広げる取り組みをしたい。梅をお豆腐に続く世界第２位の食品に―米国ニューヨークで梅料理と物販の店を出すのが夢です。（談　文責鈴木）

NEWS GREEN COMMUNITY COLLEGE
きのくに
Vol.18【4】
2013〈秋冬号〉

地域をつくる女性たち⑤

古い建物を活用して、カフェ運営
～まちづくりと、就労支援～

NPO法人かたつむりの会 代表 河原美和子

城下町であり、熊野古道の要所である田辺市は、古くから「商い」の街として栄えて来ました。しかし、時の流れや大型店舗の進出などと相まって、賑わっていた中心市街地は、変貌していったように思われます。

私たちの力は大変ささやかだけれども、街なかの活性化や地域コミュニティの強化など「まちづくり」の課題と、社会生活を営む上で支援を求める人の「就労支援」を関連づけて取り組みたいと、2008年にNPO法人かたつむりの会を設立しました。

2009年２月、古い民家を改修して、石窯で焼くピザとパンの店『町家カフェ上屋敷二丁目』をオープンし、就労支援を始めました。半年後に「障害者就労継続A型事業所」の指定を受け、事業所としての体裁を整え始めたとともに、地元のコミュニティレストランとして、小さな子ども連れのお母さんや高齢者も気軽に利用してもらえる店作り、地域の情報が集まり発信出来る店作りを目指し、様々なイベントにも（各種体験教室やライブ、寄席など）取り組んで来ました。

テレビ番組でグルメスポットとして紹介していただいた効果もあって、週末などには他府県ナンバーの車であふれるようになりました。

「ここで働きたい」という人も増え続け、『町家カフェ』だけでは対応出来なくなりましたので、二号店を創る方向で動き始めました。『町家カフェ』に近いという地の利と、その建物の歴史、重厚さに惹かれ、遊休していた「元中部公民館」の使用を田辺市に申請しました。

「元中部公民館」は、田辺市誌によると、田辺市警察として昭和24年7月に建てられたとありますが、建物は大正ロマン漂う古い洋風木造建築で、その構造形式や外観などから、たいへん貴重な建築物であると専門家は指摘します。

老朽化がかなり進んでいましたので、改修工事は困難を極めましたが、設計士、工事関係者の尽力で、建築された当時のままに蘇らせることが出来ました。改修工事費用は多額に及び、私たちのような小さな団体にとっては大きな借金を負ってしまいましたが、この歴史ある建物を地元に残せた事で、身に余る財産を得られたのではないかと思っています。

この建物で、2012年９月19日、『ララ・ロカレ』をオープンさせました。地域の人に支えられ、毎日多くのお客さまで賑わいます。「福祉事業所」としての役割とともに、食材と手作りにこだわったメニュー・製品づくり、皆さんに「来てよかった」と感じてもらえる空間づくりを目指しています。

売上が伸びると、より多くの障害を持った人を受け入れられ、給料も上がります。

労働に見合う報酬を得ることは、自信やスキルをあげていく一歩になるとともに、地元に必要とされる店作りを展開することで、「まちづくり」にも寄与出来ます。

「三方良し」の取り組みが、「ディーセントワーク～誇りある労働」に繋がっていると感じています。とはいえ、日常は様々な事柄が起こります。皆の力で、ひとつひとつ乗り越えながら、さらに一歩進んでいきたいと思っています。

▲ララ・ロカレは元警察庁舎

◀ララ・ロカレの手造りパン

▼町家カフェ上屋敷町二丁目

NEWS GREEN COMMUNITY COLLEGE
きのくに
Vol.18【5】
2013〈秋冬号〉

地域をつくる女性たち⑥

自然のなかに立ち現れる熊野の神々
語り部として伝えたい熊野の世界

熊野古道語り部（日本語・英語ガイド）／熊野円座副会長　福辻京子

自然は、一日として同じ景色ではありません。熊野の魅力は、何ですかとたずねられたら、わたしはこう答えます。

熊野の神様は晴れた時には、見渡す限り3600峰の稜線の美しさを見せ、雨の時は山霧が立ち上り幻想的な景色を見せてくれます。雨こそが熊野の森や川を育ててきたのです。悠久の時を語る熊野川の水は『勾玉のような翡翠色』です。熊野古道を自分だけで歩くのもいいでしょう。しかし、ガイドが一緒に歩き、見方・感じ方を伝えると、気づかなかった熊野を知っていただけると思います。何気ない山辺の道が世界遺産の道となり、平安時代にタイムスリップしたかのような気分になります。そのように、熊野を紹介できる語り部でありたい、といつも願い精進する毎日です。

2011年９月台風12号が熊野地方を襲いました。大きな被害を受けましたが落着いて見渡すと壊れたのは大抵人が作った、家・道路・橋・人工林でした。熊野古道は残っています。災害直後の『絆』を繋ぐ道路としても活躍しました。1000年かけて探し踏み固められた道は強かったのです。ここにも神の存在を強く感じ、感謝と共に後世に語り残すべき道と強く思いました。

今年、和歌山県版通訳ガイドである『高野・熊野特区通訳案内士』の資格を得、有償ガイドとして英語での案内を始めました。説明するばかりではなく、自然の中では目をつぶってもらい鳥のさえずりや頬をなでる風を感じてもらいます。言葉を超えて万国共通の感性に語りかけ、日本人の心を身体全体で感じてもらいたいと思っています。お客様の心に寄り添ったガイドを心がけています。最近は、『熊野曼荼羅』の絵解きを英語でもしています。『蟻の熊野詣で』と言われるほど多くの人々を魅了した熊野を、文化的背景が異なる人々に説明するのは難しいですが、冗談を交え、少しでも日本人の考え方を分かってもらえればと努めています。

旅行と言えば日本人も外国人もまず「京都」を思い浮かべます。これを旅行＝とりあえず「熊野から！」が基本イメージとなるように。そして、高校・大学を卒業後、地元でガイドが職業の選択肢の一つとなるよう収入面・ステイタスを確立して若者が故郷で暮らしたくなるようにしたい―。いま、わたしが思うことです。夢が現実になる日が来ることを。

わたしの毎日は、熊野の語り部を軸に回っています。Ｍｉ・Ｋｕｍａｎｏ、熊野川の語り部、熊野セラピスト、熊野体験企画。熊野新宮の地で、今日生きていることがうれしくて、幸せでなりません。ニックネームはＫｙｏｋｏ-ｓｕｎ（京子サン＝太陽）晴れ女でもあるけれど太陽のようにいつも皆に笑顔で暖かく接していきたい。こんな思いを多くの人に伝えたくて、今日もどんどん手帳に予定を入れていきます。

NEWS GREEN COMMUNITY COLLEGE
きのくに
Vol.18【6】
2013〈秋冬号〉

南紀熊野サテライトの窓から

和歌山大学南紀熊野サテライト

地域連携コーディネーター
古久保綾子

南紀熊野サテライトは、紀伊半島南部における和歌山大学の総合出先機関として設立され、学内外の機関や組織との連携のもと、地域課題解決や地域振興のための人材育成などにあたっています。働きながら学べる大学院授業、学部開放授業の開講や観光塾など地域ニーズに対応した講座など、多種多様なプログラムを編成し、大学の学術成果を地域に還元しています。コーディネーターの役割は、そうした大学と地域をつなぐことで、南紀熊野サテライトがあるＢｉｇ・Ｕと紀南地域のフィールドを行き来する毎日です。そして、この場所から見えてくる紀南地域の姿があります。

いま、関心を集めているひとつに、ジオパークがあります。変化に富んだ地形や地質から生まれる暮らしと知恵は紀南地域の特色であり魅力であり、これを地域振興に活用しようと2013年２月に南紀熊野世界ジオパーク認定をめざす協議会が、9つの市町村、観光商工関連業界、環境省、大学などが参加して発足しました。今後行政区域を超えた連携で地質資源の利活用や地域の誇りや特異性の掘り起しなどが期待されます。

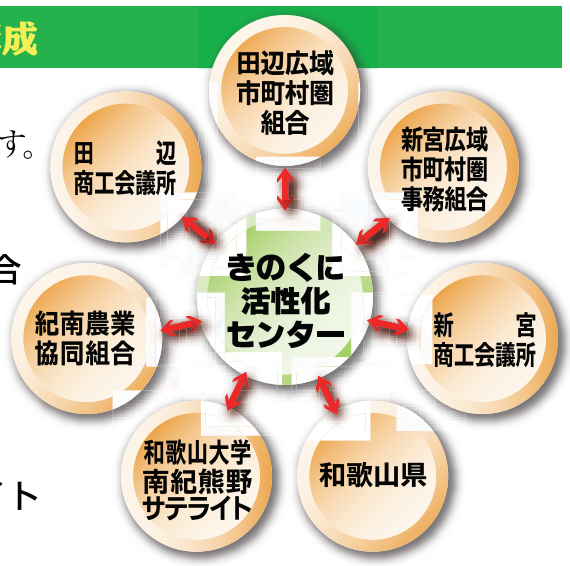
また持続可能な地域づくりには、経済の地域内循環と各種課題に対応ができる地域の中核になる人材の育成が求められています。住民みずからが、地域の価値を理解する。そのための学習機会は、地域振興への活路になることが期待されます。そこで、サテライトでは紀伊半島の恵みと災害史、地域経済などの暮らしのリスクの面から２つのコースを設けました。同時に多様な講座や議論を楽しみながら科学に親しめるカフェ、観光塾などを企画して総合的に郷土教育や防災教育につながる学習機会を企画し、若い世代からシニア層まで世代を越えた交流機会を創出しています。人口流出や地域産業の衰退、地域雇用の改善がみられないなか、地域経営や観光、教育の基礎となる総合的な議論の場が必要です。したがって、大学は学習機会の設置はもとより、行政や住民、学術、世代などを超えた学びや連携に貢献することが大切ではないかと思っています。

私自身、田辺市に暮らす一人として、田辺市、紀南地域がこれからも住みやすい地域で、発展していくことを願っています。これからも地域コミュニティの「知の拠点」であるサテライトで、地域と大学を見守り、一層のネットワークの構築に貢献したいと考えています。

きのくに活性化センターの構成

きのくに活性化センターは、
以下の団体・機関で構成されています。
（2013年11月30日現在）

- ●田辺周辺広域市町村圏組合
- ●新宮周辺広域市町村圏事務組合
- ●田辺商工会議所
- ●新宮商工会議所
- ●紀南農業協同組合
- ●和歌山県
- ●和歌山大学・南紀熊野サテライト



編集後記

開業が慶応２年という世界最古の写真館が、熊本市の中心地にある。名前は冨重写真所。

緑色のドアを開けると、壁といわず天井といわず写真の世界が広がっている。わたしの訪問の目的は、地元新町地区のまちづくりと市民性に関するインタビューだったのだが、歴代経営者が撮り続けてきた作品群が語りかける、いくつものドラマに立ちすくんだ。夏目漱石夫妻がおり、小泉八雲がいた。細川のお殿様がおり、遊郭の女性たちがこちらをみつめる。戦禍に遭う以前の熊本城もある。

150年近くにわたりつづく写真館がある、そのことだけで、話はもう聞かなくても、よいような気がしていた。それで、と気難しそうな（シャイの裏返しかもしれないが）当代が、たずねた。写真というメディアがもつ圧倒的な記録性、モノトーンの世界が映しだす時代性、それらがこの街の文化を饒舌に語っていた。そこにあるのは、残そうという強い意思、伝えようとする思いだ。まちづくりを考えるヒントがそこにあった。

NEWSきのくに、今月号は和歌山大学経済学部の大西先生にTPPと紀南地域のテーマで原稿をいただいた。　（ゆう）